

る隙が開かれたのである。ドイツ人は此の焦燥と衝動に対し自ら責任を取らなければならぬ。(6) かくて民族社会主義の前徴は既に十九世紀末から普遍的にヨーロッパ文明の没落の中に認められるのであり、ドイツにおいてはその没落から野蛮への転落が前大戦の遺産の中に準備されたのであつた。その一つは政治の傭兵「化」であり、他の一つはハプスブルグ帝国の没落の混沌の中で形成された残忍な闘争手段であつた。(7) 然しながら歴史はただ一つの軌道の上のみを進むものではなく、未来に向つて数多くの並行交叉する道をもつてゐる。ドイツは今日までは崩壊の道をとる結果になつたのではあるが、我々には人間の平和を脅すことなしに再び上昇する道も開かれてゐるのである。以前の「人類の頂点に達しようとする不適な目的を我々は今日望みはしない。我々は文化民族として安定した存在に達すればそれで満足するであらう。が然しその為には我々は自信をもつことが必要である。しかもドイツの過去に就いての考察は——それにも拘らず——我々が文化民族たることの正当なことを認めてゐるのである。

以上リッターの所説は、イギリス的な「原罪」説に対する弁明であり、ドイツ人に対する自民族の歴史を通しての自信と再建への励ましである。彼の説く歴史的環境、条件という歴史解釈の方法は、既に批判を強く受けた歴史主義的立場を依然固執してはいるが、然しそれにも拘らず、ドイツ史の諸現象を全ヨーロッパ的視野の中から説明しようとしており、「原罪」説の狭隘を学問的に退けることに成功してゐる。また彼の政治思想は経済史や社会史的視点に缺けるもの少しとしないが、国家観を政治・宗教・科学・技術・集団心理等の面から綜合して、しかも大陸型国家観と島嶼型国家観に類別しながら夫々の型のもつ内容を空疎なものに終らせぬ点に我々の学びが發展させるべき素材があらう。もつとも此のような理論はリッターが以前から用いてゐるところのもので本書においてはじめて試みられた方法ではない。然し我々は此のような弁明の書が、駁論意識の強烈な餘り反動的に自己の誇張に陥り易いことを屢々見受ける。本書が此の弊を全くといつてよい程示していない事に、我々に著者の学問的良心と人

間の美しさを感じるであらう。日本の歴史家で戦後幾人か、外国の激しい非難に抗し乍ら公正を失わず、卑屈さを感じずに弁明と未来への希望を歴史的反省として主張し得たであらうか。本書はそうした意味で研究書たる以上に我々の生き方を考えさせる心の糧でもある。

——岡部健彦——

川崎庸之著（井上光貞編、
古代社会二章二節）

奈良仏教の成立と崩壊

これは表題に記したように古代の概説書の一節として収められているけれども、古代仏教思想史についてこころみられた調期的な労作である。一昨年、井上光貞氏が古代仏教思想史の動向と題して、文献学・仏教考古学・教理史などの諸分野、あるいは古代国家の仏教政策などについて従来それぞれ独自の立場と問題によつてなされてきた諸業績を、古代国家の成立——動揺と仏教という観点から統一して新たな課題を提起された（史学雑誌六〇ノ一）。この井上氏の主張における「古代国家の成立——動揺」ということの具体的な

容は問わぬにしても、古代天皇制国家とその社会について優れた業績が次々とあらわれた今日、思想史として古代仏教をとらえようとするとき、それぞれの分野で独自の立場でなされてきた諸業績をこのような観点から統一し、全社会の問題として考えることは、当然なされねばならぬ問題である。そしてこの論稿は、井上氏が提起された課題をうけ、古代仏教史全般に渡つて具体的にこのころみられた最初のものであり、この意味で劃期的なものといえよう。事実、古代貴族たちが自身の国家をつくりはじめた六世紀の時代社会に仏教受容を考え、族長貴族と外来宗教という点でそれを考察しようとし、次いで、大化改新前夜の相対的安定期の中に聖德太子・飛鳥仏教を位置づけ、更に僧尼令の分析の中に初期律令国家と仏教の問題を真正面からとりあげ、奈良時代に入つては、養老・天平期にはじまる古代国家の動搖——行基をめぐる民衆の宗教運動と、それに対抗しつつ、古代天皇制国家をあくまで維持しようとして遂行された東大寺・国分寺の建立にいたる官寺仏教の展開の問題、更には、平安初頭の最澄・空海の新

教団開設にいたるまでの過程をとりあげ、古代国家の歩んだ道とからみあひつ、示唆多い見解がのべられてゐる。とくに、いままで川崎氏や北山茂夫氏によつて論じつくされたかに見える行基の他に、愚志一巻を著して時勢を慨したといわれる三論の学匠道慈の特異な主張と立場を通して、東大寺大仏建立にいたるまでの屈折を更に具体的にとらえようと言はれたことは卓見といえよう。

ところで、私がこの論稿に期待したことは、家永三郎氏の「飛鳥寧楽時代に於ける仏教興隆運動」(上代仏教思想研究所収)などに代表される。従来の研究をいかに踏越えるかという点であつた。すなわち、先の井上氏の動向にも指摘されているように、(一)従来の研究が前提としている古代国家についての甘い見解を捨てて新しい視野に立ち、(二)いわゆる官寺仏教が完結するまでの過程を、仏教政治と儒教政治の交替というきわめて抽象的な概念で割り切り、仏教の一進一退という形でとらえるに終る単なる思想の変遷・交替の歴史から、思想の発展をとらえるべき思想史としていかに脱脚するかという点にあつ

た。そして、この論稿の趣意もまたここにあるように思われる。しかし、(一)についてはともかくとして、(二)に関しては、私自身にとつてはなお満されないものが残るので、以下はそれを記して書評にかえたい。

まず六世紀に開始された仏教受容を論じられるにあつて、広汎な屯倉・田莊の経営に手を染め、文明社会への道を切拓こうとしていた族長貴族の行動の中に、従来のものから脱皮しようとする宗教意識の変化を指摘され、その上に仏教受容を論じようと言はれる。

まことに仏教受容の基底をなすものは、氏の指摘のごとく、族長貴族の行動をめぐる獲得されて行つた宗教意識の変化・発展の中に求められるべきであり、仏教のもたらした外来文物の高度性とか、貴族たちが仏教を政治支配の道具にしようとしたなどという従来の説は、単なる外面的な解説でしかありえない。しかし、それにもかかわらず、なお問題が残るのは、宗教意識の変化ということが指摘されながら、その具体的な追及がなされないで、「宗教意識の変化をみるといつても、それはなお族長社会の一部にうごいたものに

他ならず、個々の貴族の新たな富と権勢と

は、そこに恰好の表現をみせたといふものの、全体としてはなお旧くからの權威がそれを支えていた。……その意味では族長支配に固有な形式は、そのものとしては未だ決して動揺していなかつた」と結ばれている点である。これだけであつたなら、族長支配に固有の形式としての従来の信仰と、新来の仏教とが、水と油のように並列するだけで、たとえ族長貴族たちの一部であつたとしても、何故に従来の形式の他に、あるいはそれを捨てて

さえも、仏教という新しい宗教形態が求められたかという仏教受容の問題が、族長貴族の個々の、乃至は偶然的な心的傾向の中に解消されてしまうように思われる。宗教意識の変化とは具体的にいかに獲得されたか、どのような宗教意識の矛盾、相剋の中に新たな宗教形態が求められるにいたつたか、また、当時の仏教とはいかなる宗教形態であり、そしていかなる宗教意識によつて支えられていたか。これらのことが具体的に追及されないで、單に社会の変動だけが抽象的に語られても、それは思想の内部には及びえないのでは

なからうか。

僧尼令と神祇令との比較にはじまる初期律令制下の仏教についての所論は、結論的にいえば、全族長身分層を意大なる官僚機構に組入れ、その上に君臨する天皇は神々の中の神の子である故に、外国の神に仕える僧侶の手中にその運命を握られてはならないものであつたとされ、改新の思想的支柱はむしろ在来の神祇・儒教であり、仏教はこれに対して従属的であつたという以上に、これらに対して深く対立して行く面が警戒されていたとされる。そして、八世紀に入つて激化しはじめた律令体制の動揺の中で、完結した古代天皇制国家をあくまで守りぬくために、本来現人神であつた天皇が、三宝の奴として仏の前に拝跪することによつて、鎮護国家の宗教として仏教が絶対的優位を占めるにいたつたとされる。しかし、このように初期律令国家が地上の神性——在来の神祇を背景とした天皇の絶対的な支配の下に、現実の秩序を説く儒教にたよることはあつても、時空を超えた超越的実在者たる仏に直ちにすがろうとする仏教的思惟を排除するものであつたとすれば、七世

紀の宗教思想と八世紀のそれとの内的な連関、その発展の具体的な内容と筋道に關して、なお不鮮明な点が残るように思われる。

もつとも、この間の事情について、仏教が八世紀に興隆するにいたる礎地として、「古代天皇制確立の過程に、仏教のおかれた地位は、公的には従属的なものであつたけれども、しかしそれは新しくそこにその地位をえた天皇やその周囲の貴族が、彼ら自身のつくりだした諸關係の中で、それぞれの平安を希うことを抑えるものではなく、新しく建設された首都の美觀をそえる意味もあつて、寺院の建立や法会の勤行は、むしろ却つて盛んになつてゆく傾向にあつた」と説いていられる。しかし、このように初期律令社会において、貴族たちによつて作りあげられた国家体制が、儒教の論理を外被とした在来の神祇信仰を思想的支柱としている一方で、それらから排除されるべき仏教が、それらとは全く別個に、貴族たちの個々の心的傾向の上に信仰されていたとする説明は、果して充分であり、当をえたものといえるであらうか。

このことは、本質的には大化改新と其後の

歴史の全過程の把握の問題にまで遡らねばならないと思われるが、当面の問題に限つていえば、大化改新の思想的支柱をなしていたといわれる伝来の神祇信仰、すなわち、地上の、あるいは歴史的存在に神性を認める伝来の信仰、またその理論的外被としての当代の儒教の論理自身の中に、やがては歴史を超えた超越者に全面的に拝跪しないではないけれども合せてとらえねばならないものではなからうか。例えば、当代の儒教について、それが法家的なきびしさをもつ反面、陰陽・織維の説を含み、それ自身に神秘的な考え方をはらんでいたことが指摘されている。それを単なる指摘に終らせないで、八世紀における災異説の異様な流行への展望を踏まえたい。その法家的な論理自体をとらえて、その論理の中枢をなしている觀念についての検討がなされねばならないのではないか。また逆に、当時の仏教が果して純粹に抽象された神性への拝跪を内容としていたかどうか、仏教についてのあらゆる常識と固定觀念を捨てた具体的な分析も要請されるであらう。

先に記したように、従来の研究が仏教の先進一退を説く単なる思想交替に終らねばならなかつた欠陥は、第一に古代国家の歴史についての見解の甘さによつてゐる。しかし、仏教政治と儒教政治の交替というような、抽象的な概念を使用させたより根源的な原因は、神・儒・仏というような宗教及至思想形態に対する固定的な把握である。それらは何か神性を求め、何かあるものによつて世界を説明しようとする意識の表現形態であるにもかかわらず、その間の具体的な分析をなさずに外観上の諸特質だけにとられ、単純に政治社会の動向と結びつけようとしたところに、仏教政治下における仏教の興隆という機械的な論断と、宗教思想の發展を宗教形態の交替・変遷にすりかえてしまふ表面的な説明がうまれてくる。いろいろな宗教形態の交錯の中に、一定の時代社会に生活した人々のいろいろな神性を求めているの祈りと、その争闘を具体的にとらえ、そこから出發することこそ一番大切なことではなからうか。そしてこの意味で、この論稿に滿されないものが残るのである。すなわち、古代国家を完成させよう

とする族長貴族の行動といい、古代天皇制の動揺といい、一つの宗教形態としての仏教が、一定の時期に社会的に優位を占めるにいたる契機についての卓抜な見解が述べられていればいほど、宗教思想史として、それぞれの時期における、他の、あるいは先行する宗教形態との連関、宗教意識の發展についての具体的な所論が望まれるのである。

以上、所説を曲解して妄評を加えた点があれば深くおわびしたい。——高取正男——

若林喜三郎監修
山上村青年団編

山上村小史

象牙の塔などという古めかしい言葉は、もう誰も余り口にしなくなつたようである。それだけ学問は象牙の塔をはなれて大衆化したことを意味するのだろうか。それともむしろ学界に対するそのような批判が、何らの効果も期待し得ないということを感じた諦めの結果と見るべきだろうか、しかし若い人達の間には、大衆の生活の中に入つて、そこから